

悪い魔女だと言われるようになったのは、いつ頃からだっただろう。

「またあのウィキッドが、町に出てきたよ」

「やあね、気味悪い。いるだけで空気が重くなるわ」

魔女には名前が無い。正確には、本名を血縁者以外に教えてはいけない決まりがある。

魔女にとって名前は魂を握らせる行為だから、秘密にする必要があるのだ。

「ウィキッドの顔って見たことあるか？」

「さあ？ いつもフードを被っているよな。どうせ人様に見せられないような面だろ」

魔女は常に顔を隠さなければならない。

魔女の瞳と髪の毛は神聖な魔力が宿っているため、おいそれと他人に見せては穢れると信じられているからだ。

「なんでウィキッドって喋らないんだろうな」

「気取ってんだろ。俺達を見下しやがって」

魔女は森の外で声を発してはならない。

魔法は森の力によって成し遂げるものであり、呪文を口にする魔女の声は森に捧げられるべきと考えられているからだ。

「どうしてウィキッドなんかがいるんだろう」

「早くいなくなればいいのに」

魔女は普通の人間を守らなければならない。

それが特別な力を持つ者の定めであり、悪しき魔女になって

はいけないと言ひ伝えられている。

……まあ、代々の教えを守った結果が、「悪い魔女」ウィキッドという評価なんだけど。

医者に頼まれていた薬を届けたあと、私は町から足早に去って行った。

人の多い場所に出るといつもこうだ。どうやら町の人々は私を嫌っているらしく、こうして陰口を叩かれる。

人間達の気持ちもわからないわけでもない。無口で顔が見えず黒いローブ姿の女が、不意に町にやってきてぶらついているのをみれば、そんな反応になるのも仕方ないだろう。「悪い魔女」と言われる筋合いはないが。悪い事なんて一つもしていないのに、理不尽である。

今度からは医者の助手に薬を取ってくるよう頼んでみるか、と考えながら私は森にある家へと帰宅した。扉を開けた時、わずかな違和感を覚える。

「……………」

元より鍵はかけていない。森のど真ん中に盗人がくるはずがなく、ましてや魔女の家に盗みに入る人間なんていない。熊や猪が家に入ってきたなら、もっと家の周りが荒れている。

それに——動物が侵入者ならば、部屋に灯りなど着けないはずだ。

そうになると、犯人は一人しかいない。

魔女の家を訪ねてくる物好きは、あの人しかいない。

私は溜息を吐いて、扉を開ける。

家に入れば、客人は暖炉の前で椅子に座っていた。長い足を組んで優雅に読書しており、私に気が付くと、彼は本から顔を上げて人当たりの良い笑みを浮かべた。

「善き魔女、おかえり」

画家のモデルにされそうな微笑だった。彼は詩人に宝石だと謳われた青い瞳を細め、椅子から立ち上がると、私に手を差し出してきた。

どうやら私の荷物を持つとうと気を利かせたらしい。その爪先まで整えられた手を無視して荷物を机に置けば、美しい青年は困ったように眉尻を下げた。

「ごめん。気を悪くしたかな」

彼が小首を傾げれば、黄金のような髪もさらりと落ちた。人

を魅了するその動きは、わざとなのか無意識なのか私には判断付かなかった。

「何度も忠告したはずです。ここにはもう近付かないほうが良いと」

「危険かどうかは僕が判断することだ。ウィッチが嫌がるなら、もう来ないけど」

「私があなたに命令できる立場ではないとはご存じでしょう。意地が悪い」

私は目深にフードを被ったまま、目の前の青年を見据えた。

「立場を考えれば、ここにいる方がおかしいのです——あなたは、王子なのですから。ヴァーラル殿下」

この国の第三王子ヴァーラルは微笑んだまま、私に言った。

「おかしくないよ。君は僕の命の恩人で、僕の大切な女性なんだから」

ここ最近何度も聞いたその言葉に、私はフードの下で眉間に皺を寄せた。

ヴァラールが言った通り、半年前、私は大怪我を負った彼を治療し、完治するまで面倒を見た結果――

国一番の人気者の王子に、好かれてしまったのだ。

森が枯れ葉で埋まった秋の終わりに、私はヴァラールと出会った。

ヴァラールは葉が落ち切った木の幹を背に、座って気絶していた。

私は最初、彼を死体だと思っていた。腹に傷があり、服を赤く汚しているどころか、地面に血の跡を作るほど出血していたからだ。

この様子では、いずれ血の匂いに釣られて獣がやってくる。死体は残らないだろうと憐み、せめて身元のわかる遺品ぐらいは回収しておくべきかとヴァラールの前に座った。すると、彼がまだ息をしていることに気が付いたのだ。



「……………だ、れ……………いる……………」

ひゅうひゅうと喉を鳴らしながらヴァラールは薄っすらと目を開けた。彼をよく見れば、腹の傷は深いが口元は綺麗で血を吐いた様子は無い。どうやら奇跡的に内臓は傷ついていないようだった。

ならば、助けられるかもしれない。と、私は考え、スカートを割いてヴァラールの腹に簡単に巻いたあと、彼を担いで家に運んだ。ヴァラールは私の家の近くで倒れていたのだ。

ベッドに寝かせ、傷口を消毒してから針で縫う。痛みにはヴァラールは呻いたが、これくらいは我慢してもらった。

包帯を巻いたあと、急いで鎮痛剤や毒消しを調合し、寝ている彼に無理やり飲ませた。鎮痛剤はこれから襲ってくる傷口の

痛みや腫れを抑え、毒消しは毒を飲まされてなくとも、怪我から病気の素になる毒が体内に入ってくるためそれを予防する役割があつたのだ。

ただ、失った血を取り戻す手段はない。回復するかどうかは、結局、ヴァラール自身の生命力次第だった。

熱で魘される彼を看病しながら、私は面倒事に首を突っ込んだかもしれないと少し後悔した。

腹の傷は動物の爪や牙によるものではなく、どう見ても剣やナイフによる刺し傷であつたのだ。

そして、ヴァラールから脱がした服も仕立てが丁寧で、刺繍や裏地も凝っていた。身に着けていた懷中時計やカメオブローチは素人目から見ても高級品で、何より本人がとんでもなく美

しかった。

どこかのお貴族のお坊ちゃんが、何らかの理由で腹を刺され死にかけていた、というところだろう。その理由が跡継ぎ問題や権力争いではないことを、私は祈るしかなかった。

ヴァラールが意識を取り戻したのは、それから三日後だった。

「……ここは？」

食卓で昼食を取っていると、寝室に寝かせていた彼が壁に寄りかかりながら扉を開けてきたのだ。私は食べかけのパンを置いてすぐにヴァラールに駆け寄り、無理するなと肩を貸す。突然のことで素顔と髪を見られているが、仕方ないだろう。

「ここは私の——森にある魔女の家です。まだ起き上がっては

いけません。ベッドに戻りましょう」

魔女であることを伝えるべきか迷ったが、どうせ隠していてもバレると思い直し、私はさっさと正体を明かした。案の定、ヴァラールは眉間に皺を寄せ「魔女だとう」と問い返してきた。

「噂の、魔女は……もっと、森の深くに、住んでいるはずでは……」

警戒を滲ませた声に、私は腰に手を当てて言った。

「私達の家の位置は昔から変わっていませんよ。町の人々が森を開拓した結果、人里に近くなったのです」

私が産まれる前に領主による大規模な開拓工事があり、そのせいで森の木々は半分ほど無くなったらしい。本来はこの森全てを開拓したかったようだが、急な環境の変化によって町に獣

が下りてくるのが多発したため、工事は中止になったそうだ。私の祖母と母が手を回したとも言っていたが、具体的な話は教えてもらえなかった。二人とも私が大人になる前に死んでしまったため、領主に何をしたのかはわからずじまいである。

ともあれ、森の開拓によって私達一族は凶らずして表に出てきてしまった。この地に伝わる御伽噺ぐらいの存在だった魔女が実在していたことに、町の人々は驚き、そして恐れた。

例外は薬のやり取りをしていた医者ぐらいだろう。魔女は自給自足で生活しているが、時には外貨も必要なため、定期的に薬を売っていたのだ。

しかし、目の前の青年はどう見ても医者ではない。成り行きで助けたが、もし魔女の私に嫌悪感があるのなら、外に放り投

げよう。嫌われてまで怪我人を看病するほど、私はお人好しではないのだ。

だが、ヴァラールはきよとんと目を丸くしただけだった。彼は一拍間を置いたあと、強張っていた身体から力を抜き、屈託なく笑った。

「ははは……それは、たしかに。住む場所は、変わってないな……」

「……笑うと、傷に響きますよ。ほら、横になって。安静にしてください」

ヴァラールの反応に少し驚きつつも、私は彼をベッドに寝かせた。貴族の男は高慢な性格が多いと偏見を持っていたため、彼の気安い態度が新鮮だったのだ。

「君が僕を助けてくれたんだね……ありがとう」

ヴァラールはぐったりとした様子で横たわりながらも、話は続けた。

「もし……読み書きができるなら、手紙を書いてもらえないか？ 謝礼はその時に、君が望むだけ差し上げよう」

「その前に、お名前を聞いても？ それと、できればあそこで倒れていた経緯を教えてほしいのですが」

「ああ、すまない。僕としたことが」

彼は顔だけ私に向けて、またもや微笑んだ。

「僕の名前はヴァラール。こう見えて、この国の第三王子だ」  
お貴族のお坊ちゃんよりも、とんでもない存在だった。

森に引きこもっている魔女の私でも、流石に自国の王子達や王女達の名前は知っていた。

ましてや、国一番人気の第三王子ヴァラールなら、なおさらだ。

彼は三人の王子の中でとびきり美形で、平民にも優しいと評判だった。ある孤児がヴァラールの乗った馬車の前に飛び出し己の貧しさを訴えたところ、彼は罰するどころかその孤児が所属する孤児院に莫大な寄付をしたエピソードなどが有名だ。

人の噂話に疎い私ですらヴァラールの評判を耳にするのだから、彼の人気は私の想像より凄まじいものなのだろう。

そこを狙われて、反国王派の貴族達に暗殺されるぐらいには。



「ヴァラール殿下。保存食の準備など私がしますから、何も殿下がしなくても……」

「ただでさえ君に迷惑をかけているんだ。せめて自分の分の食料は自分で用意するのが、筋というものだろう？」

ヴァラールはそう言って、川魚を手際よく捌いていった。内臓を取ったあと、塩漬けにして保存食を作るつもりなのだ。毎年二人分の冬支度はしているため食料も衣類も足りると伝えたのだが、彼はそれでもできるだけ自分の分は用意するといって聞かなかった。まだ病み上がりだというのに、働き者である。

本来なら目と髪をフードで隠すべきだが、私は王子に素顔を晒していた。

なぜなら、私は冬が明けるまでの間、ヴァラールを匿わなけ

ればならなかったからだ。

彼は命が無事であるという旨の手紙を国王に送ったあと、二度ほどやり取りをした結果、どうやら宮廷に戻るのは危険だと判断したらしい。

そこで、反国王派にはヴァラールが別の場所で療養している偽の情報を流し、私の家でこの冬は隠れて過ごすという話に纏まったのだ。家主である私にも一応話は通されたが、返事は「はい」一択のみしか存在しなかった。まあその分だけ、謝礼を期待させてもらおう。

ヴァラールはそんな私に申し訳なく思ったのか、まだ完治していないのに働き始めた。傷が開かない程度に魚やウサギなどを取ってきて、捌いては塩漬けにしたり干物にしているのだ。町

に出れない王子の代わりに、毛布などは私が準備した。

もしかしたら、保存食を自分で作りたがるのは毒殺を警戒しているのかもしれない。

ヴァラールの腹の包帯を巻き直しながら、ふと私はそう考えた。この傷だって、裏切った従者に刺されたらしい。従者はヴァラールが返り討ちにしたが、追手がやってきたので私の家の近くまで逃げてきたそうだ。後に彼の従者が倒れた場所を確認したが、獣に食い荒らされた男の死体が転がっていたので、話は嘘ではなかった。

身近な人間に裏切られれば、赤の他人である私なんて信用できるはずがないな、と私は妙に納得した。

「ヴァラール殿下。よろしかったら食事もご自身で準備します

か？ 食料は好きに使って構いませんので」

ヴァラールに提案すれば、シャツのボタンを留めていた彼の手が止まった。

「いきなりどうしたんだ？ 僕が、君の料理に不満を持っているように見えた？」

「いえ。ただ、どこか警戒なさっているように思えましたので。なら、食事も自身で作った方が安心されるかと」

「……薄々気付いていたけど、君は天然だね」

ヴァラールは苦笑いを浮かべ、己の腹を指差した。

「君を不審に思っていたら、わざわざ傷口を晒さないよ。料理に毒なんか仕込むより、薬だと偽って毒を塗った方が手っ取り早いだろう？」

「……確かに。それもそうですね」

指摘されるまで、私はその可能性を見落としていた。薬は配分を間違えれば毒になるけれど、自分が毒を作ってヴァラールを殺すとは思いつきもしなかった。

母や祖母の「魔女の力を悪用してはいけない」と戒められていたのが、無意識に思考に反映されていたのだろうか。それを伝えれば、ヴァラールは耐え切れないといった様子で笑い出した。

「ほらね。君は考えたことを素直に口にする。最初会ったときからそうだ。その素直さが、僕が君を信用している何よりの証拠だ」

「はあ……では、保存食を作るのは、本当に冬に備えているだ

けなんですね」

「むしろ僕は、君の方が怖くないのか聞きたいよ」

質問の意図がわからず首を傾げれば、ヴァラールは腕を組んだ。

「君が僕を害する可能性があれば、逆もまたありえるだろう？  
それが怖くないのか？」

「殿下が私を？ なぜ？」

「僕は追われている身だ。僕の居場所を知る人間は少ないほうがいい。だから、口封じで——なんて理由があっても、不思議ではないと思うけど」

「するのですか？」と尋ねると、ヴァラールは苦笑して首を横に振った。

「口封じするつもりなら、最初から教えないよ。でも、ずっと疑問に思ってたんだ。君はどうして、僕を助けたんだ？ 謝礼目当て……というわけでもなさそうだったし」

ヴァラールがどこか探るような目つきで私を見る。私は困惑した。なぜ、そんな当たり前なことを聞くのだろう。

「生きてたからに決まっているじゃないですか。間に合わなさそうだったら、流石に諦めています」

「……聞き方が悪かったかな。僕を助けた目的を教えてくださいんだよ。これからの信頼関係のためにもね」

「ですから、ヴァラール殿下が生きていて、間に合いそうだったから助けたんですよ。そう話しているではありませんか」

もう一度理由を伝えれば、ヴァラールはわずかに硬直した。

何度か瞬いたあと、組んでいる腕を強くした。

「まさか、打算無しで僕を助けたの？ ……もし、僕が悪人だったらどうするつもりだったんだ。襲われる可能性だってあるんだぞ」

「そんなの、死にかけている時点ではわからないではありませんか。それこそ助けられる人を見捨てる理由にはなりませんよ」

「君の心構えは崇高だが、女性一人で暮らしているのにその考えは危険だ。今後は改めた方がいい」

ヴァラールが低い声で注意してくる。おそらく、本気で心配してくれているのだろう。私は視線を落とし、抱えていた薬箱を撫でた。



この中には、私が作った薬が入っている。代々伝えられてきた、魔女達の知識が、だ。

「……魔女の力は、他人のために使いなさいと教わりました。もし、助けられたはずの怪我人を見捨てたら、魔女としての私はその時死んだも同然でしょう」

私は顔を上げ、ヴァラールと目を合わせた。

「例え助けた人に殺される結末でも、私は己の行動を後悔しません。きつとそれが、魔女の生き様だからです」

ヴァラールは息を飲み、大きく目を見開いた。宝石のように青い瞳は吸い込まれそうなほど輝かしく、つい見惚れてしまいそうだった。

「……君は、君のような女性は、もっと利己的に生きるべきだ

よ」

ヴァラールは組んでいた腕を解き、吐き出すように言った。彼は何だか勘違いしているようだ。私は魔女として生きているのであって、別にお人好しではないのに。

「私、結構自分勝手ですよ。助けた怪我人でも、魔女の私を嫌うのならば、看病せず外に追い出したりしますから。例えばヴァラール殿下でも、そうするつもりだったんですよ」

「違う、そういう意味では——いや、やっぱり忘れてくれ。君の美点を、僕の身勝手さで汚したくない」

ヴァラールはかぶりを振って、口を閉じた。顔色が少し悪い。まだ完全に回復していないのに、長話に付き合わせたせいだろう。「もう休んだ方がいい」とヴァラールに伝えて寝室から出

て行き、その日は私もすぐに眠りについた。

翌日。調合した薬を医者に届けなくてはならないので、ヴァ  
ラールに夕食は少し待っていてくれとお願いした。すると、ヴ  
アラールはしばし躊躇ったあと、「僕が用意してもいいか？」  
と提案してきた。

「家に帰ってきたら疲れているだろう。料理にこだわりが無け  
れば、よかったら僕に作らせてくれ」

「それは助かりますが……あまり無茶しないでくださいね。殿  
下はまだ、傷が癒えていないのですから」

好きに食材を使ってい、と補足してから私は家を出て町に  
向かった。

いつも通り医者に薬を届け、ついでに町の人々の噂話に耳を

立て、最近の情報を集める。反国王派やヴァラールについての話は一つもなく、ただ今年の冬は昨年より厳しいということしか収穫がなかった。これ以上長居しても仕方ないので、私はさつさと町を出た。

家に帰れば、すでに玄関から良い匂いが漂ってきた。パンの香ばしさに誘われて食卓へ顔を出せば、ヴァラールはスープを皿によそっている最中だった。

「ああ、おかえり。ウィッチ。ちょうどポトフが出来上がったところだ。一緒に食べよう」

ヴァラールに手招きされるがまま、私は食卓に付いた。目の前にはソーセージと野菜が入ったスープと焼けたパンが並んでいる。軽く会釈してからスプーンでポトフを食べてみると、じ

わりと優しい味が口の中に広がっていった。

「美味しいです。王子様って、料理もできるんですね」

「簡単な鍋料理ぐらいだけだね。一時期、騎士団に所属していたから、野営ができる程度の知識は仕込まれているのさ」

「騎士団……確か、王太子殿下や第二王子殿下も所属していませんでしたか？　王子の責務なのですか？」

「王国の伝統だよ。王子は十五歳になったら騎士団に入団して、三年間、一介の騎士と同じく同期達と生活を共にするんだ」ヴァラールは目線を下に落とし、スープから綺麗に切られた人参を掬った。「表向きは騎士達の忠誠心を養うためだけど、実態は王子に指揮官となる素質があるかどうか見極めるための儀式さ。だから僕は最低限の三年間でさっさと退団させられた

……兄上は団長になっているのにな」

兄上、というのはおそらく第二王子のことだろう。私の情報が正しければ、第二王子は騎士団の第一だか第二だかの団長を務めていたはず。うろ覚えなので流石に口にするのを止めておいたら、ヴァラールは話題を変えた。

「それより、町の様子はどうか？　何か変わったことはあった？」

「いえ、特にありませんでした。殿下の噂話や反国王派についてもです。ただ、今年の冬は寒さが厳しいようなので、覚悟しておいた方がよろしいかと」

「そうか。あとで家の防寒を確かめておこう。薪は……乾くかわからないが、念のため用意した方がいいかもな」

「……殿下って、働き者ですよ。一応怪我人なのですから、家のことは私に全て任せていいんですよ？」

ヴァラールは「そういうわけにもいかない」と苦笑して、首を横に振った。

「ただでさえ君を巻き込んだ身なのだから、怠け者であるわけにはいかない。それに、暇だからね、一日中ベッドで寝ているのも。君の仕事を手伝えたら一番なんだけど、そうもいかないだろう？」

「えっ、大丈夫ですよ。むしろ、ありがたいです」

予想外の申し出につい声を弾ませれば、ヴァラールも私の返事に驚いているようだった。

「本当かい？」

「はい。薬の調合や占いなどは無理ですが、その他の簡単な仕事なら手を貸して下さると助かります」

ヴァラールにそう言えば、彼は乗り気で「では、明日から手伝いたい」と返事した。その後はまた他愛もない話をして、私達は一日を終えた。

次の日、私は約束通り彼に魔女の仕事の補助に付いてもらった。

薬草を保管している調合部屋で、木の実が積まれている机の前にヴァラールを座らせた。彼は部屋を見渡し、興味深そうに尋ねてくる。

「魔女の仕事と言えば、やはり黒魔術で悪魔を呼び出したりするのか？」



「そんなわけではないでしょう。それに、魔女と言っても私は魔術を使えませんよ」

「そうなのか？ 意外だ」

「ええ。母も祖母も魔術を使っているところは見たことありません。どちらかというと、占いをしたり薬を調合することの方が多かったです」

「そして今日の仕事は、薬の方か。僕は何をしたらいいんだ？」

「目の前に山積みの中の実があるでしょう？」

「……ああ」

「殻を取って実を取り出してください。全部」

「全部……？」

「全部です。その分が終わったら隣の机の分もお願いします」

ヴァラールは彼の顔の高さまである木の実の山と私の顔を交互に見た。何をそんなに驚いているのだろう。魚を捌く器用さがあるのだから、木の実ぐらい流れ作業で取り出せるだろうに。

ヴァラールはわざとらしく肩を落とし、私に言った。

「騎士団にいた時より地味な雑用を任せられているよ」

「気が変わりました？ ベッドで寝ていても構いませんよ」

「いや、やるさ。ただこの量は……今日中に終わるかな」

「できますよ。私もいつも終わらせていますし。殿下ならもっと早くできると思います」

彼の手先の器用さを褒めたつもりだったが、ヴァラールは「気軽に言ってくれるなあ」と不服気に呟いて殻を剥き始めた。

黙々と仕事をする彼を傍らに、私も薬の調合に取り掛かった。

日が暮れる頃には、木の実の山は綺麗に中身だけが取り出され、机の上に置かれていた。溜息を吐いて目頭を抑えているヴァラールに礼を言ったあと、目の疲れに効くベリーを差し出せば、「可愛らしいご褒美だな」と彼は笑った。

「ご褒美というか……どちらかというと、労いだと思いますけど。ビルベリー、嫌いでしたか？」

家の周囲に実っていた赤紫の身を房ごと手渡せば、ヴァラールは少し戸惑ったあと、ビルベリーを受け取った。

「僕に劳いか……ハハツ。君といると新鮮な気持ちになるな」

ヴァラールは何だか楽しそうに言って、房に付いた赤紫の実を摘まんでいく。形の良い口に運べば、ビルベリーの色が指に

移り、彼の唇の端を汚した。

「君はきつと、僕が持っていない物をたくさん持っている。それが少し、羨ましいい」

ヴァラールの言葉は独り言のようで、私の返事は求めていないように聞こえた。

彼の方こそ何でも手に入る立場なのに、私の何が羨ましいのか。

「ヴァラール殿下も私が持っていない物をたくさん持っているでしょう。比べるものではないと思いますが」

わからないので、私はポケットからハンカチを取り出した。

「ここにいる間、必要な貸しますよ」

そして、そのままヴァラールの口の汚れを拭く。ほんの一瞬

だけ、布越しに彼に触れる。ヴァラールが驚いている間にハンカチを離し、彼の唇の端が綺麗になつているのを確認して、私は頷いた。

「ビルベリーは手も汚れやすいので、気を付けて」

どうぞとハンカチを差し出せば、ヴァラールは肩の力を抜き、目尻を下げながら笑った。

「お言葉に甘えて、借りるとするよ。ありがとう」

ヴァラールは素直にハンカチを受け取り、手を拭いた。そのハンカチは、彼がここで過ごしている間、ずっと貸しっぱなしになった。

冬が本格的に始まった頃も、ヴァラールとの共同生活は穏やかだった。

朝起きて暖炉の火が消えかけていたら薪を追加し、湯を沸かして顔を洗う。朝食を取ったら仕事に取り掛かり、薬を調合する日もあれば編み物をして過ごす日もあった。食事は一日ごとに交代して作って、基本保存食を調理していたが、たまにヴァラールが凍った湖に穴を空けて小魚を釣ってきたので、それを焼いて食べたりもした。

ヴァラールは暇だからと調合の手伝いだけではなく、内職も積極的に行った。木彫りをしたりウサギの毛皮を処理したりしていたが、一番は籠を作ることが多かった。

「籠は多い方がいいだろう？　葉草や木の実を分類するのに役立つし、必要なかったら売ればいい」

水を含ませて柔らかくした柳の枝を編み込みながら、ヴァールは暖炉の前で教えてくれた。

内職中、私と彼はよく雑談をしていたのだ。冬の寂しさを和らげたかったのか、パチパチと燃える木の音を傍らに私達は少しずつ身の上話を打ち明けて行った。

「祖母と母が事故で亡くなってからは、ずっと一人で暮らしています。冬を誰かと過ごすのは……四年ぶりです」

「四年って……君は僕と同じ年だろ。十五歳からこの家で一人？　父親はどうしたんだい？」

「父はいません。母が言うには、旅人から子種を分けてもらっ

て私を産んだそうです。魔女の一族は代々そうやって血を繋いできたらしいです」

「……………」

「驚きました？ 普通は結婚して夫婦になるのが当たり前らしいですもんね。やっぱり、気持ち悪いと思いますか？」

「気持ち悪いなんて思っていないよ。ただ……苦労してきたんだなど。頼りないかもしれないが、せめてこの冬の間は僕が力になるよ。男手があつた方が楽になることもあるだろう？」

「十分助かってますよ。それに、ヴァーナル殿下の怪我が癒えることが、一番私のためになりますから。早く完治してくださいね」

雪が降るのが珍しくなくなった頃、私が家族について話せば、



ヴァラールは励ましてくれた。

「僕は、愛想しか取り柄がないんだ」

「強いではありませんか。取り柄。卑下するところあります?」

「ハハッ、ありがとう。でも、王子として生まれたからには、それ以外の取り柄も必要なんだよ。ううん、もっと言えば、政治も学業も剣術も僕には才能が無かったから、せめて愛想よく振舞っていただけないだ」

「欲張りですねえ。殿下は今のままでも十分、魅力的ですのに」

「……ウィッチってさ、誰にでもそういうこと言ってるの?」

「えっ？ 私、森の中でしか話せないの、町では誰とも口を利けませんよ」

「無意識か、怖いなあ……本来なら、君みたいな人が愛想が良  
いって言われるんだろうね」

「ええ……？ なぜそうなるんですか……？ 全然、性格悪い  
方ですよ、私……」

ヴァラールの傷が治りかけてきた頃、今度は私が彼を励ませ  
ば、なぜか心当たりのないことを言われたりした。

「ヴァラール殿下、手が乾燥しているではありませんか。もう、  
また軟膏を塗り忘れて」

「ああ、ごめん。あとで塗ろうとしていたんだけど、忘れてて

……取ってくれるついでに塗ってくれるか？　手がかじかんでしまつて」

「もう、仕方ありませんね……ほら、手を出して。ご要望通り、塗ってあげます」

「ウィッチの手って、意外と小さいね。細くて薄い」

「男性のあなたと比べたら、女の私の手が小さいのは当然でしょう」

「そういうことじゃないんだけどなあ」

一層寒さが厳しくなった頃、水仕事で手荒れしたヴァーラルの手に軟膏を塗ってやれば、苦笑されたりもした。

人と過ごしていたからか、今年の冬はとても短く感じた。あつという間に新しい年を迎え、気づけば地面に積もった雪が解

け始めていた。

この様子では、例年より早く春が来そうだ。すでにヴァールの傷は治っている。薬の依頼がないためしばらく森を出ていないが、ここ一か月の間に連絡係が三度も訪れてきたので、政治の問題もそろそろ片付きそうなのだろう。

実際、動きはあったらしく、久々に町へ出ると王都の噂をいくつか耳にした。

やれ騎士団の一部が裏切った、協力していた貴族も捕まった、処刑も決まってこの日に執行されるなど、何ともまあ血生臭い話だった。

この類の情報をヴァールは連絡係から聞かされていたのか。そのせいか最近、彼は落ち着きがなく、接していて違和感があ

った。

今日も家に帰るなり、ヴァラールは私を出迎えると、手を差し出してきた。

「おかえり、ウィッチ。外は寒かっただろう。荷物を貸して。僕が片付けておくよ」

「ああ、そうですね。お願いしま——」

町へ行くついでに買い足してきたパンをヴァラールに渡せば、彼は私の手も取り、赤くなつた指を見た。思わず黙つた私に構わず、ヴァラールは指先を摩ってくる。

「手袋をしていかなかったのか？ 氷のように冷たくなっているじゃないか。待つて、今お湯を持ってくるよ」

「大袈裟ですよ、これくらいで。それより、町で噂を聞きました

たが、反国王派が捕まったそうですね」

話題を変えて、それとなくヴァラールから手を離す。彼は名残惜しそうな顔をして、「そうみたいだね」とパンを台所へ持って行った。

ヴァラールが変だと思った理由は、このように少し距離が近いからだ。

元より王子にしては親しみがあるヴァラールだが、それでも輪をかけて遠慮が無くなっている気がする。私はローブを脱ぎ、部屋へ片付けに行った。そして、そつとヴァラールに触れられた手を摩る。

……あまり、人肌に慣れたくないんだけどな。

冷たくなってわずかに痛い指先が、心地よい体温に包まれた

あの感覚。それを拭うかのように私は何度か自分で手を擦ったあと、食卓へと戻った。

見れば、ヴァラールは椅子に座っていた。机には手のひらサイズの包み紙と、湯気を立てたコップが二つ置かれている。ヴァラールが、私に気づいてにこりと笑った。

「君のお気に入りの茶葉だよ。これなら、手も温められるだろう?」

「……ありがとうございます。でも、いつの間に買ったんですか? もう無かったはずでしょう」

「一昨日来た連絡係に持ってきて貰ったんだ。一緒にお茶請けもね」

ヴァラールが包み紙を開ければ、中には美味しそうなクッキー

ーが入っていた。中央にジャムが色とりどりに乗せられて宝石のように輝くそれらに、私は目を奪われた。

「可愛い……」

「気に入ったみたいで何よりだよ。好きなだけ食べていいからね」

まるで子供をあやすように言われたので、私はムツとしながら席に座った。

「殿下が貰ったものなのですから、私が食べるわけにはいきませんよ」

「僕がウィッチに食べてほしいんだよ。ダメ？　君が喜ぶと思っただけだなあ」

小首を傾げ、ヴァーラルは悲しそうに眉を下げる。彼の掠れ



た声が一層私の罪惡感を刺激し、私は「うっ」と言葉が詰まった。

「——そ、そこまで言うならいただきます。本当は、ちょっと食べてみたかったんです」

「よかった！ さあさあ召し上がれ」

先ほどの悲しそうな表情から一転、ぱあつとヴァラールは嬉しそうに笑った。控えめに一枚クッキーを食べれば、さつくりとした食感と上品な甘さに、思わず目を丸くした。

すぐく美味しい。本能のままサクサクと食べ進めてしまえば、あつという間に一枚を食べ終わってしまった。口の中に残った甘さを流すように、紅茶を一口飲めば、華やかな香りに癒されほっと息を吐いていた。

「美味しい？」

「……美味しいです」

ヴァラールは目を細めると、まるでもつと食べろと言わんばかりに包み紙をこちらに寄せてくる。私はコップを両手で持った。冷たかった指先がじわじわと温まっていく中、ちらりとヴァラールを窺った。彼は微笑みながら、静かに紅茶を飲んでいった。

甘やかされている。距離が近くなったのと同じ時期ぐらいから、私はそう感じるようになった。

こうしてヴァラールが私に菓子や紅茶を与えるのは初めてではない。連絡係からの差し入れを、彼は積極的に私と分けるのだ。私では到底手が届かない高級品に毎回気後れするのだが、

ヴァラールはそれでも私に差し出してきた。

強く拒まない私も図々しいなと自虐しつつ、もう一枚クッキ―を取る。今度はこの綺麗な形をじっくり鑑賞してから、一口齧った。バターをふんだんに使っているのか、どこか甘く柔らかな風味があり、素朴な小麦の味と合っている。中央に載せてあるジャムが果物の酸味を足し、口の中で違った味になるのがまたとても美味しい。

無言で食べていると、目の前から強い視線を感じた。私は我に返り、ヴァラールに謝った。

「す、すみません。もしかして、これ食べたかったですか？」

「えっ？ ……ああ、いや、違うよ。幸せそうに食べるなって、見ていたんだ。ウィッチが喜んでくれて、僕も嬉しいよ」

ヴァラールは穏やかな声で言った。その眼差しはとても柔らかくて、優しい。見ているこちらの顔が熱くなるほど、甘やかな笑みだった。

やめてほしい。勘違いしそうだ。私は場の雰囲気を変えるため、食べかけのクッキーを一度机に置いて、ヴァラールに町のことを尋ねた。

「結局、町で聞いた噂が本当なら、殿下はそろそろ城に戻るのでは？ 冬も今年は早く終わりそうですね」

「……………」

ヴァラールはコップから手を離すと、椅子を深く座り直し、背凭れに寄りかかった。

「実はね…………三日後に、迎えが来るらしいんだ」

いきなりの告白に、私は驚いて声を出した。

「三日後！？ そんな唐突な……いえ、もしかして、一昨日の連絡係はそれを伝えるに？」

「実はそうだったんだ。ごめんね、教えるのが遅くなって」

「謝らないでください。私のせいでしょう。調合に集中したいと、部屋に籠っていたのですから」

今回依頼された薬は難しいもので、調合するのに骨が折れる類だった。繊細な工程が多いため、二日ほど一人きりで作業していたのだ。ヴァラールは私に気を遣って言わなかったのだろう。本人も早く伝えたかっただろうに、申し訳ない。

「えっと、迎えが三日後なら……怪我の処置内容と薬を纏めた紙を渡しますね。あと、保管している殿下のコートも一回干さ

ないと……」

「ウィッチ、ウィッチ。そんなに、急がなくていいよ……急がないで」

オロオロする私をよそに、ヴァラールは背凭れから離れて前へ出る。そして、机の上に置いていた私の手に、彼の手を重ねてきた。するりと手首と手の甲の境目を撫でられて、私の肩が跳ねる。

「あ……っ、ヴァラール殿下……？」

「ウィッチのおかげで、僕は命拾いできた。それだけでなく、四か月近くも、僕をここで匿ってくれた。君と過ごした冬はとても楽しくて……かけがえのない日々だった。礼をしても、しきれない」

咄嗟に手を引こうとしても、逃がさないように握られてしま  
う。強い力ではないのに、私は振り払うことができなかった。

「これでお別れだなんて、寂しいよ、僕は」

ヴァラールは私の手を握ったまま、切なげに目を細めた。

「だから、またここに来てもいい？」

優しい声音だけど、どこか断れない言い方だった。

心が揺れる。だけど、私は踏みとどまって唇を噛んだ。

「……ダメです」

思いの外小声だったが、ヴァラールには聞こえたのだろう、  
重ねられた彼の手がぴくりと動いた。

「もうここには、近づくのも止めた方がいいです」

私は、今度こそヴァラールの手を振り払った。

「あくまでも、私と殿下の関係は冬の間だけ。それをお忘れなきように」

本来なら出会うべき身分でないのだから、と付け加える。

そうだ。数奇な巡り合わせで一時の間共に過ごしただけで、本来なら互いに出会うはずがないのだ。ましてや、国一番人気の王子と、森に住んでいる嫌われ者の魔女なんて。普通じゃない魔女と、一緒だなんて。

「……………」

ヴァラールは無言のまま、椅子に座り直した。机の上で手を組んで、私をじつと見つめてくる。

その顔は真顔のままで、表情は読めない。何だか見定められている気がして、とても居心地が悪い。堪らずヴァラールの名



を呼べば、彼はようやく口を開いた。

「身分を持ち出すなら、僕がまたここに来るのに、君の許可などいらないはずだ」

その言葉に、私は頭を殴られたような気分だった。身分差を持ち出したのは私だが、実際、ヴァラールが権力を行使すると思いの外ショックを受けている。身勝手だと思いつつも、私は意地になって「お好きにどうぞ」と答えてしまった。

「ただ、もう一度忠告はさせてもらいます。私とあなたは——一緒にいるべき存在では、ないんですよ」

すっかり冷めたコップを置いて、私は席を立った。呼び止めるヴァラールを無視して、調合部屋へ入っていく。

鍵をかけて、扉を背にずるずると座り込む。深い溜息を吐い

た理由は、自分でもわからなかった。

それから三日間、私はヴァラールと最低限の会話しかしなかった。従僕が彼を迎えに来た日も、私は別れの挨拶とヴァラールの私物を渡したぐらいだ。出て行った彼らの姿がまだ見えるうちに、私は見送りを止め家へと戻った。

こうしてヴァラールとの共同生活は終わった、はずだった。

ヴァラールと別れた一か月後。

例年より早い春が訪れ、町の人々は心なしか浮足立っていた。

そんな中、皆が同じ噂を口にしていた。

森の開拓時期に建てられたが、領主が手放し荒れ果てていた屋敷が、誰かに買われたとのこと。

その人物はまだ特定できていないが、少なくとも領主の伯爵より遥かに偉い立場らしい。あんな訳ありを買うなんて、なんて変人だ。悪い魔女に食われてしまうかもな——と、私を引き合いに出された時は、流石に少し腹が立った。言い返せないから、黙って立ち去ることしかできなかったが。

医者にも「屋敷を買った人物を知っているか？」と尋ねられ

たが、私は首を横に振った。屋敷は森のはずれに建っているが、誰も住んでいないため荒れ果てており、獣の住処になっているかもしれないため近づかないようにしていたのだ。どうしてこんなことを聞くのか疑問に思っていると、顔に出ていたのか、年老いた医者<sup>ウイッチ</sup>は緩慢な仕草で答えてくれた。

「お前さんがいるから、町の人間は森に滅多に近づかない。木こりや狩人は、森に入る時あの屋敷の前は通らん。現状、幽霊屋敷に一番近いのは、お前さんなんだよ、ウイッチ」

「屋敷の主が悪人そうだったら、教えてくれ。ただの物好きなら報告はいらん」と言つて、医者は会話を終わらせた。

そんな<sup>ウイッチ</sup>あの屋敷の買い手が気になるものなのだろうか。それとも、私と悪人が手を組むのでも恐れているのだろうか。

どちらにせよ、私には関係無い。春の日差しを浴びながら、私は帰路に着いていた。

晴れ渡った良い天気だった。過ごしやすい季節だがこうも暖かいと、歩いているとわずかに汗を掻く。ローブの生地が厚いから尚更だ。

フードが取れないよう、私は額に浮かぶ汗をハンカチで拭いた。ふとその時、ヴァラールに貸していたハンカチが返されていないことを思い出した。

喧嘩別れのような別れ方をしてしまったため、それを彼に伝えるのは気が引けた。無くしたと思って諦めようと、森のはずれ——件の荒れ果てた屋敷の前を通ったときだ。

「——ウィツチ」

聞き覚えのある声で、呼び止められた。その名前ですれを呼ぶ人物は、年老いた医者で、あの人しかない。

私は思わず、屋敷の方を振り向いた。

蔓が巻きつき錆びている門扉を、見知った青年がわずかに開いている。

美しい金髪は春の日差しを浴びて輝き、青い瞳は今日の青空よりも澄んでいた。

ただ立っているだけなのに、そこだけ絵画の一場面のように様になっている。これほど美しい人を、私は一人しか知らなかった。

「……ヴァーナル殿下？」

魔女の掟を忘れて、つい彼の名を口にしてしまった。

ヴァラールは微笑んだまま、門扉から出て私の前に現れる。

「また会いに来たよ、ウィッチ」

そして、懷からハンカチを取り出した。

冬が来る前、私が貸したハンカチを。

「今回の口実は、ハンカチを返しに」

綺麗に折りたたまれたそれに口付けをして、ヴァラールは目を細めた。

「そして——これからは、ご近所の人間としてよろしくね。ウィッチ」

彼の発言で、私は理解してしまった。

あの荒れ果てた屋敷を買った人物が、ヴァラールだということ。

そして、彼は私の忠告を無視して、今後も接触しに来ると言うことを。

あの日の青空の下、ヴァラールから手渡されたハンカチを、私は無意識に受け取ってしまったのだ。



それからヴァラールは、ほぼ毎日私の家を訪ねてくるようになった。

「ウィッチ。君が好きな紅茶とクッキーだ。それ以外にも、王都で有名な焼き菓子も持ってきた。一緒に食べてくれないか、ウィッチ」

手土産と称しては、高価な菓子を持ってきて。

「ウィッチ。君は、どんな宝石が好みだ？ とりあえずいくつも見繕ってきたのだが……ああ、もちろん、後日宝石商に君好みのアクセサリーを持ってこさせるから、プレゼントはこれで終わりじゃないよ。安心してくれ、ウィッチ」

謝礼を選んでほしいと言って、大粒の宝石があしらわれたア

クセサリーを全て私の家に置いていったり。

「ウィッチ。君はドレスは欲しくないのか？ 靴はどうだ？ それとも、家具や調度品の方がいいか？ 人手が欲しいなら用人を雇おう。君の望みを教えてくれ、ウィッチ」

謝礼は金貨で十分だと言えば、小さな麻袋にいっぱい詰め込まれたそれらを五つも持ってきて、「まだ足りないよね？」と半ば脅されたりなどもした。

そして、今日のように私が留守の時は、当たり前のように家の中で待っている。おそらく従者も付いてきているが、家の外に隠れているのだろう。ヴァラールが家にいるときは、大抵そうだった。

ここ一か月、この調子で王子とはどのような立場なのか、私

はさまざまと見せつけられた。

そもそも、王子なのにどうやってあの屋敷を買い取り、王都から片道三日もかかるこの町にどうして滞在できるのか尋ねてみれば、

「そこら辺の不都合は、僕の我儘を聞いてくれる兄や従者が頑張ってくれたんだよ。愛想がいいのが取り柄だからね、僕は」

暖炉の前で卑下していた彼はどこに行ったのやら、ヴァーラーは悪戯っ子のように笑いながら答えた。

屋敷を買う際も王子の名義のままだと周囲が大騒ぎするため、知り合いの名前を借りたらしい。どうりで国一番人気の王子であるヴァーラーがここにいても、町の人間が普段通りだったわけだ。そもそも知らされていないのだから気づけるはずもない

のだ。

権力者というのは恐ろしい。普通の人にとっては難儀なことも、金と人脈で解決できてしまうのだから。

「どうして私に構うのですか、ヴァラール殿下」

私はフードで顔を隠したまま、鞆から食料品を取り出し机に並べていく。ヴァラールが近寄ってきたかと思えば、これ見よがしに籠を置いてきた。彼が冬に柳の枝で作った、その内の一つだ。

「まだ納得していないからね。君への恩返しも、あの日の別れ方も」

ヴァラールは籠の中にリングを入れて、台所の棚へ持って行った。いつも果物を保管している上から二番目の段に、手慣れ

た様子で置く。そんな彼の後ろ姿を見て、心が痛くなった。

「殿下、やめてください。あなたは王子なのですから、下働きの真似事などもうしないでいいのです」

「そんなこと言いながら、いざ僕が王子らしく振舞うと、君は嫌がるじゃないか。ウィッチ」

ヴァラールに痛いところを指摘されて、つい私は俯いてしまった。

正直、高価なプレゼントで恩返ししようとするヴァラールが、私は嫌だった。だから贈り物は全て返したし、紅茶などの食べ物も一口も手を付けていない。ヴァラールは私の気持ちに汲み取ったのか、無理に贈り物を押し付けてくることはしなくなった。

その代わり、先ほどみたいに気まぐれに家事を手伝ってくる。

まるで、一緒に過ごした冬の時間を再現するかのよう、だ。

「何度も言っているけど、君が嫌がるなら僕はもうここには来ないよ」

ヴァラールは私の隣に来て、被っていたフードを静かに取った。はらりと中に締まっていた髪の毛が肩に落ち、視界が開ける。

「ねえ、ウィッチ。身分差以外に、君が僕を拒絶する理由があるの？」

私の顔にかかっている髪を、ヴァラールが手で退ける。そのまま彼に見つめられるが、私は目を合わせる勇気がなかった。ぎゅっと小さく手を握り締めて、祈るように言う。

「……もう、帰ってください」

声はみつともなく震えていた。ヴァラールはしばらく黙ったあと、やがて「わかった」と頷いた。

「ただ、ウィッチ。覚えておいてね」

ヴァラールは私の髪から手を離す際、指先で頬を触れるように撫でてきた。

「僕は、ウィッチが好きだよ」

やけに自信に満ちた声。私が驚いて顔を上げるも、ヴァラールは私に一瞥もせず「また来るね」と言って去っていった。

背後で扉が閉まる音がしても、私は身体から力が抜けなかった。

……ヴァラールが、私を好き？

その意味を勘違いするほど、私は世間知らずではなかった。きつと、ヴァラールは私を異性として好きだと、告白したのだ。彼に撫でられた頬を抑える。触れた指先の体温を思い出して、ぶわっと顔が熱くなった。バクバクと心臓が鳴り、胸が痛い。私は恥ずかしさから立っていられず、床に膝を付き、机に突っ伏した。

「……私だって」

——ヴァラールのことが、好きだ。

私は唇を噛んで、最後の台詞を口にはしなかった。

だって、魔女の教えに、恋人についての言及はない。

恋人がいてもいいのか、それは普通の人間でも構わないのか。

母と祖母からは何も聞いていない。代々受け継がれてきている



教本にも書かれていない。

だが、意図的に父親を排除する時点で——恋人の存在が許されるとは、私には考えられなかったのだ。

「……………」

長くため息を吐いて、私はゆっくり立ち上がった。

私の中の優先順位は変わらない。代々守ってきた魔女の教えを、私も守っていく。それが一番だ。

ちゃんと断ろう。でも、どうやって？

何となく、ただ正直に理由を話しても、ヴァラールは納得してくれなそうに感じた。

多分、彼に何度も好意を伝えられてしまえば、私の意志は揺らいでしまう。それだけ、ヴァラールの体温は私の孤独に猛毒

すぎた。今だって、まだ肌寒い夜にふと、彼が隣にいた安らぎを思い出して泣きそうになるのに。

だから断るなら一度で、きっぱりと諦めてもらうしかない。

明日までに、いい案を考えないと……と、私が立っているのに疲れて、椅子に座った時だ。

口の開いた鞆から、ひらりと紙切れが落ちた。今日、医者に渡した薬の納品書の写しだ。拾い上げれば、ずらりと並んだ薬品の名前の一つに、妊婦用のつわり止めが目に入った。

——そうだ。これなら、もしかしたら……！

私は拾った紙を裏返しにして、思い浮かんだアイデアを整理していった。

「やあ、ウィッチ。約束通り、また会いに来たよ」

「……お待ちしてました。ヴァラール殿下」

翌日の昼。ヴァラールは従者と共に私の家に訪れてきた。彼は隣の男にちらりと視線をやると、男は黙って下がり、ヴァラールだけが家に入ってくる。

「待っててくれたんだね。嬉しい。昨日の言葉を、覚えていてくれたの？」

ヴァラールは変装用に被っていたフードを取った。脱いだ外套は椅子の背にかけて、彼は食卓の前へ座る。私は素顔のまま茶も差し出さず、ヴァラールと対峙するよう椅子に座った。

「殿下。そのことで、お話があります」

ヴァラールは余裕そうな態度で頷いた。

「わかつている。そのつもりで今日は来たのだから」

「確認ですが、ヴァラール殿下は……私を、恋人にしたいという認識でよろしいでしょうか？」

直球だね、とヴァラールは苦笑した。

「そうだよ。僕は君が好きで、恋人にしたい。許されるのなら、その先も望んでいる」

温かく、優しい声だった。私を見つめるその瞳は甘く、ほんのり熱を帯びている。切なげなヴァラールの表情を、私は直視できず、すっと目を逸らした。

「……無理です。殿下。私達に、その関係は許されません」

「また身分の話？ それだったら——」

「違います、ヴァラール殿下」

ヴァラールの言葉を遮る。訝しげむ彼をよそに、私は大きく息を吸った。

大丈夫。昨夜考えた通りに嘘を吐けばいい。私は少し椅子を引いて、そつと己の腹を摩った。

「私はもう、純潔ではないのです」

視界の端で、ヴァラールが息を飲み、硬直したのがわかった。何を言われたのか理解していない彼に、私は構わず続ける。

「この前、旅人に子種を分けてもらいました。まだ孕んだかは判断できませんが、子を授かったら、魔女の教えに従って育てるつもりです」

胸が痛い。こんなに心臓が跳ねているのは、大胆な嘘を吐い

ているからなのか、それともヴァラールへの罪悪感からか。

どちらでもいい。これでヴァラールとの関係が終わるなら、胸の痛みなど些細なものだった。

「孕んでなくとも、純潔ではない女が王子の恋人など、王が許すはずがありません。ですから、諦めてくださ——ひっ!？」

私が意を決してヴァラールと目を合わせた瞬間、無意識に悲鳴が口から零れ落ちた。

恐ろしいほど、彼は無表情だった。ごっそりと感情が抜け落ちたヴァラールは、まるで人形のように美しく、同時に生気がなく幽鬼のようにも感じた。

がたん、と音を立てて、ヴァラールが立ち上がる。乱暴な仕事ではなかったというのに、私は威圧され、指一本動かせない。

ヴァラールは私の傍まで来ると、私が座っている椅子の背凭れに手を置いた。

「いつ？」

「っ、えっ？」

「いつ、旅人と交わったの？」

静かな口調だった。ヴァラールは私を見下ろして、顔を近づけてくる。普段は宝石のように煌めいている瞳が、今は底知れぬほど暗く濁っていた。

「まだ結果がわからないということは、交わって日が浅いのだろうか？　いつだ？　いつ君は、どことも知れない馬の骨と寝たんだ？」

「あ……っ、一か月前、です。殿下が、屋敷を買う前に……」

「ハハハッ！　ねえ、ウィッチ。僕は愛想が取り柄だ。取り柄にできる程度には、それなりに他人の表情を読み取れるんだよ」

ヴァラールは可笑しそうに笑う。どこか不気味な笑顔で顔を覗き込まれ、背筋がぞくりと冷たくなった。

「君は真っ直ぐで、純粹で、とても素直な性格だ。可愛いウィッチ。そんな君が、嘘を吐くときはどんな顔をしているのか、自覚したことはあるかい？」

「……っ！」

思わず顔を触る。しまった。もしかして私には、無自覚に嘘を吐く時の癖があるのかもしれない。ヴァラールにそれを見抜かれていたら――



「そんなに動揺してき。君は嘘を吐くのに慣れてないね、ウィッチ。君の態度が何よりの答えだ」

ヴァラールは半ば確信めいた声で、虚言を指摘してくる。私は焦って首を横に振った。

「っ、う、嘘じゃなっ」

「まだ誤魔化すの？ 正直に話した方が、君のためにもなると思うんだけど」

「そ、そんなに疑うなら……確かめてみますか？」

思わず虚勢を張れば、ヴァラールは黙り込んだ。先程まで威勢の良かった彼が大人しくなったことに、私は勝機を見出した。

開き直って挑発した方が、ヴァラールは却って嘘を信じるかもしれない。例えば交わることになっても、服で恥部を隠して挿

入するのが普通だと魔女の教本に書いてあった。破瓜の血は服で拭ってしまえばいい。子作りは激しい苦痛を伴うらしいが、痛みは何とか我慢しよう。

私は震えを隠すようぎゅっと手を握り締めて、精一杯ヴァラルを挑発した。

「た、旅人と寝たことが証明できればいいのでしょう？　なら、私と交わってみればいい。それが一番手っ取り早いです」

「……………」

「どうしました？　私の話を嘘と決めつけておきながら、いざ事実を確かめるのは怖いんですか？　ねえ、黙っていないで、何か言ったらどうです——っ！？」

私は最後まで話せなかった。突然、椅子の背を後ろへと引つ

張られ、足が浮いて床から離れたからだ。

椅子が音を立てて床に倒れる。一緒に地面に落ちそうになった私の身体は、ヴァラールが腕を掴んで無理やり引き留めた。

「い……っ！ 殿下、いたい……」

ぎりぎりど骨が軋むほど二の腕を強く捕まれ、私は痛みで顔を顰める。だが、ヴァラールは私の訴えを無視して、今度は腰に手を回した。

「あのね、ウィッチ」

ぐっと腰を引き寄せられて、ヴァラールと身体が接触する。

私より背の高い彼に引き上げられているせいで、足が爪先立ちになる。

「君が嫌がることはしないって言ったけど、僕にも我慢の限界

ってものはあるからね？」

腰に回っていた手が、つー……と背骨をなぞるように私の背中を這い上がってくる。

そのまま頭を捕まれ固定された私の顔に、こつんとヴァー  
ルは額を合わせてきた。

「君が思っているより、僕って性格悪いんだよ」

吐息がかかるほどの距離で、彼はまた不気味に笑った。けど、その青い瞳だけは笑っていないことを、私は逃げられない  
今になって気付いてしまったのだ。

物音がして駆け付けた従者に一言二言話してから、ヴァラールは私を寝室へと引き込んだ。冬を越す際に彼に貸していたベッドへ、乱暴に放り投げられる。

「……っ！ ヴァラール殿下、痛いのはやめてください……」

「ああ、ごめんね？ 好きな人からあんまりな態度を取られたから、ちよつと手加減できなくて」

ヴァラールはそう言ってベッドへ乗り上げてくる。年季の入った一人用のそれは、私達の体重に耐え切れずギシギシと悲鳴を上げていた。

ヴァラールはそれに構わず、私に覆い被さってきた。古びた木の匂いと共に、彼が纏っている香水が鼻につく。私は顔を逸

らして、ヴァラールの胸を押し返した。

「殿下、退いてください。動けません」

「何か不都合でもあるのか？ 確認していいんだろう？ 君が

旅人と寝たかどうかを」

「この体勢では嫌です。私が上に乗ります」

緊張を悟られないよう、努めて冷静に伝える。ヴァラールは眉を顰めたが、すぐに「積極的だね」と言って身体を起こした。

「いいよ、僕が下になる。それで、最初は何をするつもりなんだ？」

私がベッドから退けば、ヴァラールが代わるようにそこへ寝転がった。私は彼の上へ跨り、胸当たりで手を付く。ヴァラールの身体は見た目より逞しいのか、触れた箇所から筋肉の硬さ

が伝わってきた。治療の時は何とも思わなかったのに、今になって意識してしまう自分が嫌だった。

「……最初もなにも、やることは一つでしょう」

大丈夫。手順は覚えている。私は深く呼吸をして、スカートの中に手を入れた。

膝立ちになって、下着を下ろす。ローブは着ていないが、幸いにも今日は厚手のスカートを履いている。生地が透けて行為や性器を見られることはないだろう。

秘部を露出する程度にショーツを下ろしたあと、後ろ手でヴァラールの性器を探る。逆の手順の方が良かったかもしれない、と若干後悔しながら彼のズボンのチャックを外した。

指先でくるくると周辺を撫でれば、ヴァラールが小さく息を

呑んだ。彼の反応から肉棒を見つけ、指を使って持ち上げる。

あとは挿入するだけだと、スカートで隠したまま腰を下ろし、秘部に押し当てた。柔らかいそれを何とか膣に入れようと手を動かす。だが、焦りからか中々上手く挿入できない。私が苦戦していると、ヴァーラルが「待って」と胸に置いていた方の腕を掴んできた。

「まさか、もう挿れるつもりなのか？」

「？ 当たり前です。子作りなんですから」

「……全然濡れてないし、慣らしでもないだろ。僕だって勃っていない。こんな状態で交わるのは無理だ。……一回でも経験があるなら、わかるはずじゃないか？」

最後はまるでこちらに呆れたように言ってきた。そうだった。



教本にもそう書いてあったのに忘れていた。だけど、私はヴァーラーの態度に何だか腹が立って、ぶっきらぼうに言い返した。

「魔女の教え通りに実行しているだけです。ヴァーラー殿下は口を出さないで下さい」

「……ふうん？」

無理やり続けようと手をまた動かせば、ぐいっとヴァーラーが突然上体を起こしてきた。もう片方の腕も掴まれ、肉棒から手を離される。

「ちよつと、邪魔するのはやめて——っ！？」

文句を言おうと口を開いた直後、ヴァーラーの顔で視界がいっぱいになった。ふにっつと、柔らかい感触が唇に当たる。私より高い体温と湿った吐息。触れた唇の角度が変わってようやく、

私はヴァラールに何をされているのか理解した。

「っ！？ な、なにを……！ んんっ！？」

咄嗟に顔を逸らしたが、ヴァラールに後頭部を抑えられ再びキスをされる。彼は片手で私の腕ごと身体を包み込み、互いに隙間ができないほど抱きしめてきた。暴れてもビクともせず、むしろ仕置きと言わんばかりに口付けの激しさが増す。

「ん、ん……！ ……っ、っ♡」

こまめに角度を変えて、ヴァラールはしつこいほどキスをしてくる。啄むような口付けは段々離れない時間が長くなり、私の唇を味わっているのではないかと錯覚してしまう。

息苦しくなっただけに口を開けば、ぬるり♡と生温かいものが流れ込んできた。口内への侵入物に驚いて逃げたくなるも、

ヴァラールの手がそれを許さない。がっしりと頭を固定されたまま、彼の舌で口を犯される。

歯の裏を舐め、上顎を擦り、奥で縮こまっていた私の舌を絡んで引っ張り出す。頑張って押しのけようとしても、ただ互いの唾液が混ざるよう舌先同士が擦りつけただけで、何の抵抗にもならなかった。

「っ♡ つ、っ♡ あ……♡」

ヴァラールの舌で愛撫されるたび、口の中が甘く痺れ、頭がぼやけていく。強張っていた身体が徐々に脱力し、腕がだらりと垂れ下がる。何だかお腹が重くて熱い。ヴァラールに跨って開いている足が落ち着かなくて、ぎゅっと太股をわずかに寄せた。

「あ、あ……♡ んあ……♡」

いつの間にか耳をヴァラールの両手で塞がれ、ひたすら口内を犯す水音を聞かせられる。ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡と唾液が鳴らす音に混ざって、鼻にかかった女の声が反響した。それが私のものだとわかっていても、止められなかった。

「あっ、あっ♡ あっ♡ ♪♡♡」

顔が熱い。息が苦しい。視界が涙でぼやけ、目の前にいるヴァラールの顔も焦点が合わない。

気付けば小さく身体が痙攣している。ヴァラールの舌の動きに合わせて、びくびく♡と背中が震え、腰が揺れていた。

知らない。こんな感覚知らないのに。秘部が彼の腹に当たる少し圧迫されて、それが気持ちいい。もつと追い求めるよ

うにカクカク♡と腰を擦り付けければ、ヴァラールの目元が弧を描いた、その瞬間。

「くくくっ♡♡」

ぢゅっ♡、と舌先をヴァラールに強く吸われた。不意打ちの刺激に、びくんっ！♡と肩が飛び跳ねる。一気に全身の体温が上がり、頭の中がじゅわじゅわ♡と溶けていく。まるで熱を逃がすために身体が不規則に痙攣しているのに、腹はずくずく♡とさらに熱を貯めていった。

「——は、あ、あっ♡♡ ひゅ、はぁ……♡♡」

ヴァラールがようやく唇を離せば、互いの口から糸が引いて落ちた。私が必死に息を取り込んでいると、ヴァラールは私の頬を両手で包み込み、顔を上げさせてくる。私を見下ろす彼は、

楽しそうに舌なめずりしていた。

「汗すっごい……リンゴみたいに顔真っ赤にさせちゃってさ。まだキスしかしてないのに」

ヴァラールの片手が、私の額に触れた。汗で張り付いた前髪を取り、横に流す。汗を掻くほどキスに夢中になっていた事実に、今更羞恥心がやってきて顔に血が集まっていく。

私はわなわなと震えながら、ヴァラールの胸を力いっぱい叩いた。

「くくくっ、口出さないでって、言ったじゃないですか！ どうして邪魔するの！ 大人しくしててくださいよ！」

「やだよ。だって君のやり方が気に食わないし」

ヴァラールは私の手を取ると、そのままぐるりと私の身体を

反転させた。仰向けに寝かされ、最初と同じく彼が覆い被さってくる。つう……♡と、首筋を撫でられ、私は思わず唾を飲み込んだ。

「君の話が本当かどうかは、僕なりの方法で確かめさせてもらうから」

「か、勝手なことを……こんなまどろっこしいことしないで、さっさと突っ込めば済む話でしょう」

「無粋だなあ。旅人相手にもそうだったの？ どうせなら、好きな人には気持ちよくなつてほしいだけなんだけどな」

すりすり♡と、ヴァラールは今度は私の手を撫でてきた。指先で手のひらの肉を擦ってきたり、指の間を引っ掛けるように触ってくる。ぞくぞくと背を這い上がってくるむず痒い感覚に

身をよじりながら、私はヴァラールを睨んだ。

「っ、さ、触るの、やだ……！」

「そっか。じゃあ、慣れるまで触ってあげる」

「な、なに言って——ひっ！？♡」

ぐっ♡と突然股間を圧迫され、上擦った声を出してしまう。

見れば、ヴァラールの膝が私の間に割り入っていた。中途半端に脱いだ下着が押し戻され、ぐちゅっ♡と水音を立てて秘部に張り付いた。

「服はまだ脱がなくていいよ。僕、楽しみは後に取っておくタイプだから」

ヴァラールは喉を鳴らすように笑って、私の頬を撫でた。

「本当のことを話したくなったら、いつだって言っていから



ね。  
それじゃあ、  
続きを始めようか」